

48.化学療法を受けている子どもへの家族の食事支援

山崎麻朱

医学部附属病院 2階東病棟

1. 研究の背景と目的

化学療法を受けている子どもは、治療に伴う食欲低下と味覚変化などの副作用や制限の多い食事内容により、食事摂取が困難となることが多い。子どもは、病院食への興味の低下や嗜好の変化から病院食は摂らず、レトルト食品やファーストフードに頼っていることが多く、自宅が病院から遠い子どもは、家族の手料理が食べたいという希望も叶えることができないのが現状である。このような状況から、少しでも子どもに食べてもらおうと家族や栄養師と連携を取りながらメニューを工夫をしたり、子どもの免疫力に合わせて、持ち込み食を許可するなど個別に対応しているが、栄養摂取量の増加につながる効果的な介入方法は見いだせていない。

本研究は、化学療法を受けている子どもが、食べることを「楽しい」と感じ、「食べたい」と思える食事環境を整えるために、実際に家族が食事に対してどのような思いを持ち、子どもへの食事支援を行っているかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

看護部倫理委員会の承認後、研究内容と結果の公表について説明、同意を得た化学療法を受けた子どもの家族 14 名を対象に、半構成インタビューガイドを用いた面接調査を行った。

3. 結果

1) 食事に関する思い

家族は感染予防食について、「治療のためには当然」「病気のことを考えたら仕方がない」など『食事制限は必要/仕方がない』『バランスはとれているので、家でしてあげられたらいいと思う』など『栄養バランスがとれている』『安全なもの』と捉えている一方で「メニューが年寄りくさい」など『子ども向けのメニューではない』『味もメニューも年寄り向けで子どもも手をつけなかった』など『子どもが食べられるものが少ない』『好きな物が食べられなくてかわいそう』などと『かわいそう』という思いを持っていた。

2) 食事に関する取り組み

家族は、食べて良いものを『医療者に確認する』、看護師や栄養士に相談しながら『食事メニューを変更する』、調味料を使う、お弁当を作る、レトルト食品を活用するなど『持ち込み食に頼る』、「ハンバーガーを手作りした」、「食堂へ行くことを提案する」といった『食べる楽しみをつくる』、外泊の日を示して『モチベーションをあげる』などの対処行動をとり、食事摂取量を増やすための工夫をしていた。一方で、持ち込み食に対しては「大丈夫だと思ってももしものことを考えたら恐くて不安だった」「病院の給食を食べてもらうのが理想」などと『安全性への不安』や『栄養バランスの偏り』『持ち込み食は禁止されたら食べる物がないが、経済的には負担』と『経済的負担』を感じていた。

3) 食事に関する要望

家族は、食事支援について『感染予防食のメニューの改善』や『調理場の提供』『食事環境の調整』を要望していた。全ての家族が「子供向きのメニューがあればよかった」「感染予防食でも選択させて欲しい」と『感染予防食のメニューの改善』を希望していた。

4. まとめ

家族は、子どもに少しでも食べて欲しい、何とかしなければならないと、親としての責任を感じ、自分たちができることを模索しながら行動していることが明らかとなった。看護師は、家族の思いに寄り添い、子どもの食事を一緒に考えながら支援していくことが大切であり、スタッフ間での統一した知識の習得を行っていくことが必要であると考え。今後は、他職種と協働し病院食の改善や食事環境の調整を行っていくことが課題である。

本研究は対象者が少なく、一般化するには限界がある。しかし、子どもや家族の食事環境を少しでも改善できるように努めていきたい。